



2010年 夏の経済教育セミナー 報告

■8月9日 東京中学

中学校教員のための「夏休み経済教室」が、東京証券取引所グループと経済教育ネットワークの共催により、8月9日に東京の東証ホールで開催された。まず1日目は、最初に東証グループの代表と司会の三枝利多教諭（目黒区立目黒中央中学）が開会の挨拶を行った。

セッション1（10:10-12:00）では、篠原総一教授（同志社大）が「教科書で教える経済の仕組み」について講演し、社会の制度や活動の仕組みを理解することが重要であること、またそこで生産における「分業」および市場における「交換」が経済の仕組みの核をなす概念であることを強調した。その上で、「企業モデル」のアウトラインが示され、そのようなモデルで生産、分業、交換などが中学生にとっても容易かつ現実的に理解できることが示された。

次にセッション2（13:00-14:30）では、吉川洋教授（東京大学）が「経済と経済教育」というテーマで講義し、まず経済的な言葉よりも考え方を教える重要性が指摘された。またそれとの関連で、効率性やイノベーションの面では市場経済のほうが社会主義経済よりも勝っていることは確かであるが、所得分配の公正は市場経済ではなかなか実現できない問題として残ることも説明された。さらに、日本の財政問題やグローバル化の遅れなども取り上げられた。

以上の2つのセッションで、参加者から、経済学の成果を教えることの是非、市場経済とグローバル化のマイナス面、および財政問題解決のためのインフレの必要性といったよい（難しい）質問が提起されたが、このことは、参加者が単に中学生に教える以上に進んだ経済学の分析や成果について学びたいという意欲をもっていることを示しているように思われた。

これらの講演のセッションの後、参加者は証券史料ホールの見学と株式模擬売買体験を行い、さらに懇親会に参加し、情報交換などを行った。

（文責：宮尾尊弘、宮尾 blog より引用）

宮尾尊弘先生のレポート参照ページ

1日目の要旨：<http://miyao-blog.blog.so-net.ne.jp/2010-08-09>



■8月10日 東京中学二日目

まず総合司会の三枝利多教諭（目黒中央中学）の簡単な開会挨拶の後、野間敏克教授（同志社大）が、「教科書で教える金融の仕組み」についてプレゼンを行った。ここでは、カネの貸し借りが貸し手と借り手の両方の満足度を高めることが強調された。その上で、直接金融と間接金融の説明がなされ、日本では金融のほとんどが間接金融で、直接金融はわずかである事実が指摘された。さらに、金融市場における利子率の決定、また株式市場におけるバブル発生の可能性についての説明があった。そして最後に、日本の貨幣や金融のマクロ的な全体像が示され、金融問題に対処するための金融政策が取り上げられた。

次のセッションでは、三枝教諭が、「企業モデル・シミュレーションの実践」と題する模擬授業を行い、ハウスメーカーの例を取り上げて、企業が他の企業と直接的あるいは間接的に市場で交流するために、会社内にさまざまな仕事や職種が存在することを示した。ここでの基本的なアプローチは、一日目に篠原教授が提示した企業モデルによっているといえる。

その三枝氏のプレゼンに対して、栗原久教授（信州大学）がコメントし、企業もモデル・シミュレーションは学ぶモチベーションを与える上で有益な手段であるが、重要なのは、そのような手段で達成すべき学習目的を明確にすることであると述べた。

以上のプレゼンのセッションの後、グループ・ディスカッションが行われ、篠原総一教授、野間敏克教授、栗原久教授、加藤一誠教授、それに三枝利多教諭を加えた 5 人が、中学生に経済学をどう教えたらいいかという参加者の質問に答える側に回った。

この 2 日間の経済教室は、経済学そのものをもっと知りたい、また経済学を教室で生徒たちにより分かりやすく教えたいと望む先生方には、非常に有用な内容であったと思われる。

（文責：宮尾尊弘、宮尾 blog より引用）

宮尾尊弘先生のレポート参照ページ

2 日目の要旨：<http://miyao-blog.blog.so-net.ne.jp/2010-08-10>